

海の家 (北の脇・淡島海水浴場)

日本の渚百選に選ばれている北の脇海岸。きれいな水と遠浅、広大な松林と1.8キロにも及ぶ砂浜は西日本随一ともいわれ、海水浴シーズンには、毎年8万人もの海水浴客が訪れる。そして、夏を海で楽しむ人々に、安らぎの空間を提供しているのが海の家だ。

自慢の海もさることながら、海の家が取り持つ縁で県外からのリピーターも多いという。そんな心かよう海の家を訪ねてみた。



「いらっしやい。開放感 たつぷりの敷席で食べるたこ焼きは、ひと味違いますよ」

海の家では、夏を海で楽しむ人々との会話が弾んでいる。店が少し落ち着くのを待って、海の家にまつわる話を伺った。

「昔は、竹で組んだ簡易な家だったんですよ。売る物も氷やジュースといったものだけ。ほんでも人はよくけきよったな。浜が人で真っ黒になるくらい。バスも臨時便を出しての。パチンコ台まで設置されとったわ」

今から60年ほど前の光景である。

海を家の歴史をたどると、一枚の写真にいきつく。昭和3年に撮影され

たこの写真には、北の脇海岸の沖合約450メートルに浮かぶ根津磯に建てられた敷席が写っている。

当時、大工で民宿を経営していた故・神野米吉さん(中林町)が、観光客をもてなそうと建てた敷席で、実はこれが海の家の前身といわれている。海の家は海上から始まったのだ。

その後、敷席は自然のいたずらによって転々とする。現在の位置に軒を連ねるようになったのは、昭和36年の第2室戸台風がきっかけ。新設された防潮堤沿いに敷席を設けることで、浜辺で遊ぶ子どもたちを見守ることができた。高床式に造られた敷席には、先人たちの知恵と工夫が宿っている。

昭和30年代の最盛期には43もの家が軒を連ねた。しかし、夏のレジャーの多様化や後継者不足などで、現在は7軒(淡島では7軒が1軒)にまで減っている。それでも、海の家は元氣そのもの。夏限定の敷席に安らぎを求め、訪れるリピーターも多い。

さあ夏本番！

潮騒に思いを馳せながら、海の家で夏のひと時を過ごしてみたいかがだろうか。きつと夏の思い出がつかれるはず。

写真提供：神野元さん(中林町)

